

英国 スターリング大学  
スコットランド日本研究所  
94/95年度機関報告

アシュウェル・石田小百合

1. 機関概要

名称：The Scottish Centre for Japanese Studies (スコットランド日本研究所) 又は Department of Japanese Studies (日本研究学部)  
設立：1988年  
制度：四年制学部 (Single honours degree programme, Combined honours degree programmes 及び General Degree Programme)  
一年制修士課程 (diploma, M/phil, M/lit)  
博士過程 (コースなしリサーチのみ)  
日本語図書数：約3500冊 (歴史、宗教関係が特に多い)  
施設：L.L.ビデオ、衛星放送をつかった自主学习設備、コンピュータによる学習設備 (E-Mailを含む。又独自のソフトウェア所有)  
住所：University of Stirling  
Stirling, FK9 4LA  
電話：+44-(0)1786 466080  
FAX：+44-(0)1786 466088

1.1. 教師陣

教授： J. F. モラン (Prof. J.F.Moran)  
講師： イアン・リーダー (Dr. Ian Reader)  
クウェーク・アンピア (Dr. Kweku Ampiah)  
テッサ・キャロル (Tessa C. Carroll)  
千穂子モラン  
大橋 純  
語学教師：  
星野 礼子  
石田小百合  
秘書：アン・ゴルドー (Anne Goldie)  
ビジネスマネージャー：  
ジュリー・ジョンソン (Julie Johnson)

## 1.2. 学生数

	前期	後期
一学年	35	23
二学年	16	14
三学年	16	15 (日本へ留学) *
四学年	12	12
修士	8	7

(日本語コース1994/95)

\*第三学年の後期には、日本の大学で日本語コースに参加する。95年後期に日本へ留学した学生の内訳は、上智大学4名、中央大学4名、関西外国語大学7名となっている。

## 2. カリキュラムについて

スターリング大学では二学期制をとっている。第一、二学年目は専攻科目のほかにも一つの科目を必修しなくてはならない。そのための科目として日本語を選択する学生がいる。前期、後期又学年によって学生数が異なるのはそれによるものが多い。第三学年からは、日本語を専攻科目としてとる学生のみが残る。(General Degree Programmeを除く)日本語コースでは、主に語学のみ教えられているが、他に三年生対象の現代日本社会とビジネス、二年生対象の現代日本の文化と社会という2つのコースが設けられており選択出来るようになっている。又今年から一年生対象の科目として東アジアの歴史と文化という講義形式のコースが設けられた。これらのコースは日本語研究所の教授、講師、又学部外の専門家により教えられており、学生に日本の文化的歴史的背景を学ぶ機会を与えるという意味で重要な役割を果たしている。

### 2.1. 日本語コースの実際と問題点

#### 2.1.1. 学部:

一年次の目標は、日本語を使って簡単なコミュニケーションが出来るようになるということである。そのために、日本人教師による会話授業が週四時間行われた。この範囲内で、隔週L.L.の授業を設け、リスニングの向上をはかった。さらにこの時点で既習の文法事項が入った文が読め、書けるようになることも目標とされているため、英国人教師による文法説明、簡単な読解の授業が週二時間行われた。ひらがなは、最初の一週間ですべて教えられた。二年次は、一年次に続くより複雑な日本語の理解を目標とされているため、やはり一年次と同じ様に会話授業に四時間、文法説明、読解に二時間あてられている。これらを円滑に行うため、一、二年を通して同一の教科書が使われた。94/95年度に使用された教科書は、筑波ランゲージグループのSituational Functional Japanese vol.1.2.3 (凡人社、以後SFJ)で、これを一年次は二週間に一課、二年次では、一週間に一課プラス三、四週間に一度の復習の割合で行った。さらに授業時間が少ないため、自主学習用のテープがわたされ、作文などの宿題も定期的に行われた。

三年次は、日本へいく前の総まとめとして、教師自身が作成したトピック中心の教材が使われ、ディスカッション形式に日本人教師と三時間、英国人教師との読解の授業が二時間行われた。四年次では、会話力より読解力、作文力が問われるような内容のカリキュラムが組まれている。(読解二時間、作文一時間、会話二時間)これは、日本から帰国した時点で、会話力にはかな

り自信がついたが読み書きがまだ不十分であるという学生側からの意見も考慮されたものであり、特に日本語のみを専攻とする学生のために三年次と四年次の前期に日本文読解（小説、新聞の記事など）の授業が行われている。また、総まとめとして日本に関する題材を自主選択した卒業論文が課されている。

一、二年次の問題点としてまず最初に挙げられるのが、以前にも述べたように、三科目必修のため、学生の日本語学習に割ける時間が限られており、また日本語を専攻としない学生も半数ぐらい含まれているため、あまりハードな計画を立てることが出来ない。SFJが日本で学習している学習者を想定して出来ており、そういった性質上内容が盛りだくさんであるため、教師が量をうまくコントロールしないと学生が消化不良を起こしたり、学生のやる気を失わせる結果になったりする。これは漢字の学習について特に言えることであった。副教材としてBasic KanjiBook(凡人社)を使用したのが、BKBとSFJの漢字が必ずしも一致しておらず、時には学習している課とは無関係の熟語や読み方が出てくるため、結局学生にとって二重の負担になってしまった。

三年次では、学生のニーズにあった教科書がなかったため、教材作りから始めなくてはならず教師の負担が問題になった。

#### 2.1.2. 修士課程：

修士課程は、経験豊かな日本人講師一人が中心になり教えられている初心者を対象とした週二十時間程度の集中コースである。一年間でSFJを三冊教えるためかなりのスピードである。

SFJ終了後、修士論文を書いている学生が現在5名いる。93/94年度に新しく導入されたE-mailを使った作文指導は、今年度ダイワ日英基金の助成金プロジェクトとしてさらに発展しこれからは期待される。（詳しくは「スターリング大学におけるプロジェクト概要と日本語指導の実践報告」丸山大四郎を参照）

このコースで挙げた問題点は、学生の出発点での日本語能力の差である。ある学生は四年日本に住んでおり日本語を学習した経験があり、また他の学生は「こんにちは」さえ知らないといった具合で、レベルの違う学習者を教える難しさがあった。また小人数のコースを運営するため経費がかかり、学費が高額になったため、学生に金銭的な負担がかかる（自費でコースに参加している学生がほとんどであった。）ということも忘れてはならない問題である。

#### 3. スコットランド日本研究所の特徴

スターリング大学の日本研究学部はスコットランドに存在する唯一の学士コースである。そのため学生もスコットランドのみでなくイギリス、北アイルランド、ウエールズ、アイルランド、スペイン、フランス、ドイツ、デンマーク、アメリカ、オーストラリア、韓国、台湾など各国から集まっている。スコットランド日本研究所という名称は、スコットランドの教育省から命名されたものであり、ここでは非営利のビジネスサービスも行われている。このビジネスサービスは、研究所と外部の関係を保つ唯一の窓口でありまた日本企業とスコットランドの企業の掛け橋として重要な役割をはたしている。主な活動としては、通訳、翻訳、夏期、短期日本語および日本文化集中コースの運営、名刺作成などがある。